
冥獄の国

槻影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冥獄の国

【コード】

N5609Q

【作者名】

槻影

【あらすじ】

沢山の他人に迷惑をかけて生きていた僕はある日突然死を手に入れた。一瞬ほっとしたけど……だけど……予想なんてできるものか。まさかその先があるなんて。

第一話：生前の事を思い返すと

生前の事を思い返すと、僕、死桜院老の人生はどうしてなかなかやっぱり恵まれていたと思う。だけど、幸せだったかというところ、それは断じて否、とはつきり断言出来る辺りどうしてなかなか僕の人生も複雑怪奇なものだったと言えるだろう。

『死桜院』なんて物騒な名前を持って生まれたがなるべく善人であらうと幼い頃から自分を律し続けた僕は結局大して人を助ける事も出来ず、それどころか助けることができた数のその十倍を遙か超える人々に迷惑をかけて　そして死んだ。

哀しい事だが、これはこれで僕にとってはハッピーエンドに限りなく近い。何たって、死桜院の家系は近隣住民はもちろん世界の裏側にいる皆様にまでに莫大なる迷惑をかけて生きているという迷惑きわまりない家系だったからだ。そして、捨て子だったとかそういう特別な事情を残念ながら何も持っていなかった僕は間違いなくその血筋を引いていたのである。

当初は周囲に迷惑をかける程度だったのだが、歳を経る毎にだんだんその範囲が広がっていき、父上にもう何もやらずにじっとしていきくと泣いて謝られたのがつい昨日の話。そして、あーあー僕はもう存在価値がないんだ、隕石でも落ちてきて死なないかなーとか思ってたらしいの間にかここにいた。死の瞬間は覚えていないが、案外こんな物なのかもしれない。

そんな僕の目下の悩み事は、どうやら死には先があるという驚愕

の新事実だった。

何故分かるかって？

頭に三角形付けた骸骨の列に今現在進行中で並んでいるからだ。恐らくここが音に聞く地獄という奴なのだろう。

辺りに広がるのは、暗い暗い空、真つ赤に輝く満月の下、黒々とした葉を茂らせた薄暗い森、そこを綺麗に列になって歩く灰色の骸骨の列。

風景自体は、ちょっと暗い森の中といった感じでおどろおどろしい雰囲気はしているものの、僕の今まで持っていたイメージとはちよつと違つたが、ここが地獄じゃなかったらなんて表現すればいい？ 少なくとも天国ではないでしょ。断じて悪気はなかったとは言え、結果的に僕は結構な人数の人間に迷惑をかけていたから、死後に天国に行けるわけがないの。ちよつと自分でいって悲しくなるけど人生こんなもんなんだろうね。

しかし、それにしてもこの光景はなかなか壮観だ。

一系乱れぬ骸骨の行進なんてそうそう見ることはできないだろう。

しかも、それぞれの骸骨はじーっと見ていると何だか人間の姿が浮かんできたりする。生前の姿だろうか？ それがなかなか面白い。大体は強面のおじさんだったが、稀に妙齡の美女がいたりして、一体何の罪を犯したのかなーとか想像したりしてるとずっと行進するのも全然苦じゃなかった。

死んでいるからか、お腹も空かないし食べなくていいから当然排

泄も必要ない。眠くもならないし、当然性欲なんてものもかけらも感じ無い。おまけに疲れない。ある意味とても快適だ。

僕はこの列に先に何かがあるのか知らないから、歩かなくてもいいといえ歩かなくてもいいのかもしれないけど、後ろからも前から骸骨がきているのでそれに反抗するのもなんなんだ、つて気になつてくる。横に飛ばせば何とか抜ける事も出来るんだらうなーとか思つてもみるけど、生前散々迷惑をかけたのに死後の世界でまで人に迷惑をかけるのもどうだらう、人じゃないけど、なんて考えると僕には従うしか道はなかった。

でも、やっぱりやっぱり時間は貴重なものだ。

骸骨の行列も、壮観とは言え長い時間見ていると飽きてくる。骸骨の生前を思い浮かべるのもそれはそれで楽しかったけど、生涯の趣味に出来るレベルの上等な趣味というわけでもない。

そんな事思い始めたのは、前方に行く骸骨と後方に並ぶ骸骨、見える範囲の全ての骸骨の人生をそれぞれ20通りほど想像した後の事だった。これでも頑張ったんだけど、ほらやっぱり皆当然悪人だらうから、その生前の功績を思い浮かべるのにも限界があるのだ。まさかこの列に人を一度も殴った事がないような聖人なんているわけがない。人のバリエーションがもうちよつとあつたらよかつただけど、ないものねだりをしてしようが無い。

となると、今度は気になるのはこの列の先の事だ。一体何があるのだらう？

地獄の定番で針の山？ 血の池？ まさか団体様ごあんなーいなんて歓迎してくれるわけではないよね？ それに針の山や血の池が果たして骸骨に通じるのかっていったらどうなんだろう？

前の骸骨や後ろの骸骨に質問しようとか一瞬思ったけど、それも結局断念せざるを得なかった。

きっと前後に並んでる人（骸骨）達も事情は知らないだろうとか、そんな事を考えたからじゃない。簡単な話声が出なかったからだ。そりゃそうだよな。骸骨に声帯ないもん。口を開けてもカタカタとしか言わないし、相手がカタカタいつてきても僕には相手が何をいつてるか判断出来る自信はちよつとない。

こりや思った以上にシビアな行軍だなー……もしかしたら目的もなく地獄を永遠にさ迷い続ける事こそが悪人に課せられた罰なのかもしれないなーとか延々と同じように見える道を歩きながら考える事500回、そこで初めて状況に変化が起きた。

前の骸骨が立ち止まって、急に後ろを向いてきたのだ。

そして、その骨のような細い指につまんだペラペラの紙をこちらに渡してきた。突然の事で反応が遅れちゃって、気づいたときには何事もなかったように行軍が再開してたけど、僕の手の中には十平方センチ位の四角形の紙が残っていた。

『1262394331』

紙にはその数字の羅列のみ。

でも、その数字だけで十分だった。僕だって馬鹿じゃない。

無意識の内に一番上の紙をとって、同じように後ろの骸骨に残りの束を渡す。

そして、残った手の上の紙をそーっとつまみ上げた。

これ見たことあるよ。うん、生前見たことある。あまり貰う事なかったからたまにだけどさ。これってあれだよな。

整理券

えっと……いちじゅうひゃくせんまん……ははは十億二千万番目かー十億もあれば一生安泰って……

ないないないない

ありえないよ。だってさ、全世界の人口でおよそ60億でしょ？この紙の数はそのおよそ六分の一で、そして僕の後ろには途切れなく骸骨が続いてる。

そりゃこれだけ多ければ配られてくる間に少しは処理されてるんだろうけど十億番目って事は人気のラーメン屋の行列なんてレベルじゃない。並ばないと食べられない人気のラーメン屋が100件あっても全然足りないよ。

終わりがあるって解っただけまだいいかもしれないけど、これは酷い。だって、これってこの行列にぼーっと並び続けるのがしばら

くは続くつてことだ。具体的に数字が出てきたからこそ我慢がならない。死んだ後くらいさつさと安らかに眠らせて欲しいよ本当に。もしかしたら生前生きていた時間より長くなるんじゃない？

僕はもう、その時点で真面目に列にならぶのが嫌になってしまった。もともと死桜院でそういう家系なんだ。並ぶのなんて真つ平御免。死桜院の直系13人の中には先頭に立つのが自分じゃないなら列を崩してしまえなんて自分勝手な人間さえいる。僕は自称そこまでは酷くはないはずだけど、それでも10億なんて規格外れの数を言われると、どんな人間でも真面目に並ぶの辞めたくなるんじゃない？

まあ整理券なんてものが配られている以上、列から外れて先頭にいつても門前払いされる可能性が高いけど、それでも方法はある。

券を交換すればいいんだ。

別に券に名前が書いてあるわけじゃないし、きつとバレないだろう。そうだ、交換しよう。ちょっと位、順番が遅くなっても怒る人はいないよね。

僕は前の人（骸骨）の肩を叩こうとして ふと思った。一個くらい順番が上がったって大して変わらないし、次々前の人（骸骨）と券を交換していくのもそりゃ一つの方法だけど 時間がかかる。

これって本末転倒じゃない？ 券を取り替えるのにちょっと時間が掛かるだろうから、列を乱すことにもなるかもしれない。それは規律の乱れを好まない僕の流儀に反する。かといって僕は並びたくない。これはあれだよあれあれ。

先頭近くの人と交換すればいいんだ。

それなら、僕は一回の交換で大丈夫だし、列も乱れない。唯一僕が交換した人（骸骨）は門前払いくらうかあるいは整理券の順番が来るまで待たされる事になるだろうけど、それはしょうが無い事だよな。ちよつと悪いかなーとは思うけど、歩かなくていいなら寝て待つていればいいんだ。眠くならないつてのは寝れないつて事じゃない。

僕は優柔不断だから、決めたらすぐに実行しないと覚悟が無駄になつてしまう。

タイミングを見計らつて、さつと横に抜けた。僕の後ろを歩いていた骸骨は一瞬こちらを見たけど、我関せずと言つた態度で僕が抜けて開いた一人分の穴を詰めた。

なるほど……抜けたらこうなるのかーつてそんな事言つてる場合じゃない。そんな事をいつている間にも、行列は着々と前に進んでいる。急がないと、逆に遅くなつちゃうよ。

何しろ十億の列だから、先頭に走つて追いつくのも並大抵の事じゃない。そして、僕はマラソンが三度の飯より嫌いだなんだ。生前も身体を動かすのはとことん苦手だったからね。といつても、決して頭を動かすのが得意だつたつて訳じゃないけど……人間それだけじゃないもんねえ。

でもそんな運動が苦手な僕でも大丈夫、今の僕は骨と皮のようなもの……じゃなくて骨だ。真正銘の骨だけだ。筋肉に疲労がたまわるわけがないし、実際結構な距離歩いたけど全然疲れてない。今なら何十時間だって走れるだろう。

片膝を付けて前を見る。クラウチングスタートの構え。問題は道が悪くぐにやぐにや曲がってる上に骸骨が中央を独占しているせいで普通の百メートル走のようには行かない事だけど、まあどうせ死んだんだしこの際木に頭をぶつけて死んでも悔いはない。

どうせやるならスタートだけでも勢い良くやろう。

実は、クラウチングスタートなんて高校の時授業でやったつきりだからあまり覚えてないんだけど、形だけだから適当でもいい。

僕は、出来るだけ大きな声で合図を出した。

「カタカタ！（スタート！）」

そして、スタートした直後すぐ前にあった木にぶつかって僕は綺麗に気絶した。

第二話：骨なのに気絶する

骨なのに気絶するんだ。頭蓋は空っぽなのにね。

何時間気を失っていたのだろうか、目を覚ますと、そこは何故か空だった。

ワールドワイドな人間を自称する僕はもちろん飛行機なんかは数えきれないほど乗ったことがあったけど、今回は少し違う。

なんて言うか、足元が安定していなかったんだ。下を見ると、薄いカーペットみたいなのがあった。しかも純白。浴場の前とかによく敷いてある足拭き用のマットにちょっと似ているそれは、とてもじゃないけど空を飛べる代物には見えない。絨毯とか筭だったらまだ分かるんだけど……

「あ、目が覚めた」

恐る恐る下を見下ろすと、そこにはずーっと絶え間なく続く黒い木々が見えた。高度のせいかわい小さくしか見えないけど、これは凄い。見渡す限りずーっと森だ。んー……地平線までずっと黒なんだけど、ここって地平線まで何キロなわけ？ 地球の大きさで人間の視点の高さからだったら地平線までは4.5kmとか聞いたことあるけど、今座ってる場所は上空だし世界観が全然違うからさっぱり予想すらつかない。そもそも、そういう難しい事を考えるのは小枝かの甲の役だ。

「ちょ……こら！ 身を乗り出すと危ない！」

んー……あ、まさかあの微妙に見える白い線って骸骨の行軍？

うわぁ……本当にずっと続いているよ。一体何人いればこんな列を作れるんだろう。しかも意味もないのに……

見る分には全然構わないけど、あそこにさっきまで参加していたと思うと寒気がする。さっさと判断してよかったよ。

しかし……高いなあ。ここから落ちたらばらばらになっちゃいそうだ。

「ちょっと！ こつちの話も聞け！」

ん？

何か話しかけられた気がして、後ろを向いてみて、僕は初めて気付いた。

このマットの客が僕だけじゃなかったことに。

そこにいたのは……！！

んー……何これ？

「……何か凄い失礼だと思わない？」

「いや、そういうのいらなから。心を読むとかあんたは僕の家族ですか？」

「口に出してるのよッ……！」

耳もとで思い切り怒鳴られ、一瞬ぐらりと身体が揺れた。

危ない危ない。落ちたらどうするのさ。鼓膜がなかったからよかったものの……ってあれ？

僕何で話せるの？ 声帯ないよね？ 事実さっきまでは口を開いても言葉は出なかったわけ……

あれ？

僕は、思わず目の前に正座で座ってる灰色の塊を見た。マットの後ろ半分を占有してる妙な生き物を。

お世辞にも綺麗とは言えない塊。見た目に反して声は随分綺麗だったけど……失礼を承知で言うけど何なのかわからないよ。一応声かけてきたから生き物だとは思っけど……

「えっと……どちらさまですか？ まさか僕の知り合い？ じゃないよね……こんな知り合いいたら忘れるわけないし……」

「あのね……」

「あ、もしかして母さん!？」

「えッ!？ 母さん!？」

んー……驚いた所を見るとやっぱり違うんだろうな。大体母さんまだ生きているし。

何かこのゴミゴミした所とかそっくりなんだけど……

「やっぱり違うか……ちょっと似てるけどね」

「え!？ 似てるの!？ この外勤の職員全員に大不評の制服とも呼べぬ灰色の塊着ている着ている私が似てるの!？」

制服だったのか……

うちの母さんは、こういう何だかよくわからない物を無理やり衣

類にするのが得意だという死桜院でも異端の人間なんだ。死桜院の血を受け継いでいるわけでもないのにもともとおかしいと評判の一族を完全に食ってるからね。

しかし……さすがにそれはない。服じゃないじゃん。まああつたかそうっていうか完全防備だし、防寒着としては……ありなのかなあ？ でもそれじゃあ前が見えないと思うけど……。

「あの……似合いますね」

「えー？ 似合う？ 本当に？ 本当の本当にこの何だか灰色の物体が私に似合うと思うの？」

「あ……えっと……暖かそうというか……面白いですね」

「あ、今本音いったね！ 今の本音だよな？ 面白って……私面白から着てるんじゃないんだけど！」

灰色の塊が跳ねた。何これ。関わり合いたくないけど面白い。でもこの面白さは痛い面白さだ。芸人としても受けないだろう。どちらかと言うと心霊番組に出たほうがいい。

「あー……まあ落ち着いた方がいいよ。ちょっと水でも飲んで、ほら」

「これはどうも……ん……はあ……やっぱり水は冥獄のおいしい水に限りますねえ……ってこれもとも私のです！」

「へー……その制服そーなってるんだね」

「うああああああああ……しいいまったああああ。姿見

せちゃんいけない規則なのにいいいいい！」

僕の差し出した水を飲んで勝手に自爆した元灰色の塊は随分と愉快な人のようだった。

まあそれ以上に、制服っていうかダンボールかぶってる見たいな形での灰色纏ってるとは思ってなかったし、それが一番驚きだけど……まさかカポツと外すとはね。それもう服じゃないんじゃない？

中から出てきたのは、随分とこざっぱりとした小柄な女の子だった。まあこんな灰色のわさわさ脱いだらだれだってこざっぱりとするけど……中身も丸くなっているとはいえ灰色の被り物を被って全部隠れるくらいだからそりゃ小さいか。

もちろんちゃんとした服を着ているよ？ 裸だったら僕は間違いなくこの子を変態認定するけどね。

僕の感想は正直それくらいだった。なんていうか、今までのインパクトが強すぎて中身が解ったからと言って感傷は特にない。何か損した気分だ。んー……強いていうなら一番下の妹に歳が近いかなあ……まあうちの妹はこんなに愉快じゃないけど。

しかし、良く考えてみるとこの子は骨じゃない。なんていうか、ちゃんと質感がある。久しぶりに見る人間だ。普通なら……人間なんて全然不思議でも面白くもないけど、こんな所で会うとなるとそれはちよつと面白いね。

だって地獄だよ？ 僕も骨だし。明らかにおかしいじゃん。地獄で鬼にあったとかなら分かるけど、地獄で普通の人間に会ったとかおかしいじゃん。

とりあえず自己紹介でもしておこうか。円滑な人間関係は挨拶からって言うし。

「僕の名前は死桜院老^{しおういん なるう}。よろしく。ところで君は？」

「ああ、これはご丁寧に。私は職員番号1430095番彩橋宇楠^{あやはし うすな}です。今後よろしくお願いしちゃだめだったああああああああ！ わわ、忘れてくださいー！」

何か騒いでる。一体何なんだろう？ 調子でも悪いのかそれともいつも通りなのか……
とりあえずよろしくしてくるって事でいいんだよね？

「何が何だかよくわからないけどよろしく。職員番号1430009番彩橋宇楠ちゃん」

「いやあああああああ！！ 職員番号まで！ だ、けどまだわからない！ すぐ忘れる可能性もあるかも……！！」

「石見を多くうなで覚えた」

「語呂合わせ！？ しかも意味がわからない！」

「まあ落ち着いて。ほら、お小遣いをあげるから……」

「えー！？ そ、そんな……悪いですよ。でもどうしてもって言うなら……ってそれは私の財布だあああああ！ あああ、いつの間に取りつたんですかッー！！」

これいくらなんだろう、と、見覚えのない真っ白な硬貨らしきも

のを手に乗せて観察していると、財布をひったくられた。まあ僕のじゃないけど……それに取ったなんて人聞きが悪い。ちよつと自然と手が出ちゃったただけだ。ちよつと手を伸ばしたらそこにあつたからつい借りちゃったただけだ。もちろん後から返すつもりではあつた。それに好奇心旺盛な事はいいことだと父さんも言つてたし。

宇楠ちゃんは、叫び疲れたのか真つ赤な顔で肩で息をしながら、他に取られた物がなにか確認している。何も取つてないよ。他に何も持つてなかつたから……てか本当に失礼な子だ。

「はあ……はあ……貴方一体何なんですか！ まさか命の恩人にこんな事するなんて地獄の悪魔もびっくりですよ！」

「地獄の悪魔もびっくりつて……褒め言葉？ てか命の恩人つて？」

僕の様子に、宇楠ちゃんはようやく落ち着いたらしく、ゆっくりと深呼吸しながら言った。

落ち着いて観察すると、意外と顔は整っている。生前の世界で言う十人に十人……とは言わないが、十人に五、六人は『ん？』と振り返る感じの可愛い娘だ。微妙な表現だけど、そんな感じ。

「褒めてないです。あれだ……貴方『白紙の森』で気絶してたんですよ。たまにいる、死人の行き倒れつてやつですね。……あ、今の面白いですか？」

「……………」

何それ。詰まらないつてか不謹慎だよ。言いたいことは分かるけどね。

んー……地獄の連中つて皆こんなのかな？

真面目な僕とは結構相性が悪そうだな。

「そ、そんな睨まないで！ 悪かった！ 私が悪かったから！ それで、私が見つつけてわざわざ助けてあげたのですッ！」

「あー……一応お礼言っとくよ。ありがとう」

若干涙目で胸を張ってる宇楠ちゃん見てると弱い物いじめしてるみたいで……どうしても調子が出ないなあ。まあつまらなかっただけで別に怒ってたわけじゃないんだけど。

んー……でも、これからどうするんだろう？

職員というのなら、宇楠ちゃんは目的地を知っているのだろう。

相変わらず真っ赤な月が怪しげな光を地に降らせている空を見る。綺麗だ。あんなの生前だとSFXでしか見れなかったから……やっぱり実物は違う。

遙か地上には、相変わらず黒々とした木々とそれを横断する白い線が見えていた。風景が変わらないからわからないけど、このマトトはどれくらいの速度がでてるんだろう？

「今現在この船は冥獄本部の審判所に向かっています」

え？ ちょっと待った。

「……船？」

「そ、つつこむのそこ！？」

だって……これマットじゃん。空飛んでるし頑張ってるとは思っけど足拭きマットだよ。これが船は……ない。さっきの灰色の被り

物制服くらいありえないよ。

「し、失礼な！ ま、まあ確かにちょっとは私もそー思うけど……
このこにはこのこのいいところがあるんですよーだ」

あ……また心読んだ。

いや、僕が口にしたってたんだろっなー……いつも一言多いって言われるんだ。

「そんな事言っつて、宇楠ちゃんさっきから被る気配がないんだけど……」

てか邪魔そうに下に敷いてるんだけどそれでいいの？

一応制服だよな？ 正体がどうこう言っつてたしそれでいいの？

「いいんです！ 後で貴方は記憶を消して貰うことにしました！
うう………評価が下がっちゃうけど………」

「地獄の職員も大変だねえ………記憶消すっつてどうやるの？」

灰色の制服らしい物体を抱きしめながら、宇楠ちゃんはじとーっ
とした視線をこちらに向ける。

「いや、他意はないよ？ 別に宇楠ちゃんの記憶なんてどうでもいいし。ただ方法に興味があるだけ」

「がーん。い、いや、私もその方がありがたいけど今はさすがに失礼でしょ！」

正直な気持ちをいったら怒られた。

んー……なんて答えればいいのか。

考えていると、宇楠ちゃんは呆れたように大きくため息をついた。眼に微妙にかかっている前髪を避ける仕草とかは、さすがにちゃんと女の子してる。だけど記憶にとどめておきたいって程でもないね。

「はあ……本当に抵抗する気はなさそうなんでサービスで教えてあげますけど、簡単に言えば地上で言う超能力ですよ。審判課の職員の一部に記憶を消し去る力を持つ方がいるんです。大丈夫、心配いらないです。痛くはないらしいですからね」

真剣な眼は、とても嘘を言っているようには見えない。

地獄があるなら超能力もあってもおかしくないのかな？ 何たって空飛ぶ足拭きマットだしね。

難しい事はわからないけど、死桜院も物騒な力持ってるのいるし、事実は小説より奇なりって奴なんだろう。そういう事に僕はした。

「へー……世の中広いね。痛くないなら僕としても願ったり叶ったりだけど……宇楠ちゃんは何か出来ないの？」

「わ……私はいいです！ 救援係だから！」

そういうもんなのかな。ま、どうでもいいか。

そこからは、しばらく静かになった。

もちろん同じ”船内”にいる以上多少は話すけど、先ほどみたいにテンションは高くない。

さっきまで喧騒が嘘みたいな穏やかな時間だった。

どうせ忘れるんだろうけどこういうのも悪くないかもしれないね。

第三話：あ、見えた！

「あ、見えた。あれです。あれが冥獄本部です！」

「おー」

宇楠ちゃんの声を受けて、僕は下を覗き込んだ。半分くらい頭が下に出るけど、気にしない。高い所はけっこう得意なんだよね。

そこには、文字通りこの世の物とは思えない光景が広がっていた。ずっと続いていた黒の森が途絶え、突然メタリックな白に輝く巨大な壁が現れる。

それは、地獄の門というより白亜の御殿、白亜の御殿というより

「要塞？」

「はい！」

巨大な壁は天高く聳え、地平線の彼方まで続いている。かなりの高度を飛行しているこのマットから見てもその全景は見通せない。何より、壁のところどころからには不自然な境目がある。まるで今にも開いて砲口が現れそうな……いやいや、まさかね。いくらなんでも。

地上の方では、壁の一部が口を開け、骸骨の列を飲み込んでいた。その周辺には長机の前に並んで座っているいくつもの灰色の塊。多分宇楠ちゃんと同じ地獄の職員が、骸骨から整理券を受け取っている。その周りを、何か黒い棒みたいなものを担いだ灰色の塊がうろついていた。見張りかな。どうでもいいけど、いや、本当に。

てかやっぱり廻ってきたあれ、整理券だったんだね。どうしよう。交換出来なかったよ。てか、無くしちゃったよ整理券。多分気絶した時かな。

「宇楠ちゃん……」

「ん？ 何か？」

徐々に高度を下げていくマット。急いで言ったほうがいいね。

宇楠ちゃんも一応職員らしいし、こういう時は頼りになると信じていたい。

「あの、下の骸骨達が渡してる券なんだけど……」

「あ、はい。あれは、徐々に前の方から配られてるんだけど、最近大量に送られてきたのでなかなか配り終わらなくて……貰う前にはぐれたんですね？」

「え？ ……あー、そうなんだよ。持ってなくてさ。持ってなくても入れるかな？」

「大丈夫です。私が優先券持ってるので……」

宇楠ちゃんは、財布から一枚の紙を取り出した。配られた整理券は白だったけど、宇楠ちゃんの取り出した整理券は赤だ。真ん中に0と大きな文字で書いてある。

「はい、どうぞ。無くさないように気をつけて」

「……く……宇楠ちゃん。僕は初めて君を見直したよ」

「へ！？ な、なんですかいきなり」

「是非友と呼ばせてほしい！」

「えええええ！？ 友って！ てか今まで私舐められてた！？」

く、僕は一気に宇楠ちゃんの評価を五段階上げた。

さすが……思わずうつろったよ。伊達にダサイ制服は着てないね。

「あのー……聞こえてるんだけど」

「友よ！ 助けがいるときはいつでも呼んでおくれ！」

「……いいから離してくださいッ！」

釈然としないような表情で宇楠ちゃんに言われ、掴んでいた肩を離す。

いや……気絶してよかったよ。まさか優先券がもらえるとは思わなかった。この感動……借り1だね。死桜院に借りを作るとは宇楠ちゃんもやり手なのかなあ。んー……忘れないように頑張ってみようかな？

地上に見えていた豆粒が、あっという間に大きくなり、そして何日ぶりか何時間ぶりに地面にたどり着いた。

骸骨が出入りしている入り口の付近だ。コントロールもばっちりか。

マットからぴょんと地面に飛び移る。マットもいいけどやっぱり固い地面は格別だ。

宇楠ちゃんが、呆れたように地面に降りる。いつ被ったのか、灰色の塊姿だ。

僕は君と違って空飛ぶマットに慣れてないからね。

どうやって動いているのか、宇楠ちゃんがうねうねとこちらに向かってくる。

どうせだったら一回くらい被ってみたらよかったかなあ。

「言い忘れましたが、貴方は既に返霊を終えています。消滅の危険があったので救援班の判断でさせていただきます」

「んー……返霊って？」

「純霊……骸骨みたいな形から元の姿に戻す事です。話せるようになったでしょ？ 今まで気付かなかったんですか？」

「あー……話せる事はわかってたけど鏡とか見てなかったからね」

あまりに自然すぎてすっかり忘れていた。そう言われてみれば、手も骨から普通の手に変わっている。服まで現世で着てただし。なるほどね……気付かなかったよ。

んー何だ、ちよっとずつ宇楠ちゃんの評価が上がっていくぞ？

……意外と優秀なのかな？

「今失礼な事考えなかつたです？」

まるで僕の考えを呼んでいるかのようなタイミングで、声をかけてくる。

僕は、そろそろと移動している骸骨達を一度見てから、宇楠ちゃんの方に向き直った。

一応義理は通しておかないと。礼を言うべき時は言わないとね。

「宇楠ちゃんて凄かったんだなーってさ。色々ありがとう。本当に助かったよ」

「え……いえ、私は仕事をしたままでです」

とか言つて、ちょっと感動してるね。声色で微妙に分かる。

それほど長い時間ではないとはいえ、自分が助けた相手からはつきりとお礼を言われるのはなんとも言えないむずがゆさと感動があるものだ。僕もそれなりに人助けしたことがあるからわかる。

「それじゃ、これからどうなるのかわからないけどまたどこかで会ったらよろしく。こっちは覚えてないだろうけど、会ったら声くらいかけてよ」

「……気が向いたら、必ず」

その声は、さっきの掛け合いから比べると考えられないくらい重い声だった。顔が見れないのが残念だ。

宇楠ちゃんもまだまだだね。仕事はきっちりと片付けないと。感傷も憐憫も邪魔な感情だよ。まーいいけどね。僕は笑って別れられるし。例えこれが今生の別れになっても。

「それじゃ、そろそろ行くよ。あの入口でいいの？」

「はい。優先券を見せればすぐに審判所に通されるはずですよ。……そこで記憶も消されるでしょう。もちろん私の記憶だけです」

「了解了解。それじゃまたねー。宇楠ちゃん、まさか寂しい？」

灰色の塊がびくりと僅かに震えた。分かりやすいなあ。まあ寂しいってわけじゃないんだろうけど……一時の気の迷いかな？

「……まさかそんな訳……貴方は私を忘れたら寂しいですか？」

「ん……寂しいよ？」

「……………ッ」

くるりと後ろを向く。多分灰色被つても見えてるからねあれ。にやけかける表情を無理やり歯を食いしばり、何とかこらえる。宇楠ちゃん、可愛いんだから。分り易すぎ。

腕を上上げる。別れの代わりに。他の灰色から視線を感じるけど構うものか。

んー……でも面白かったね。あ……また人に迷惑かけちゃったけど、まあいいか。いつか借りは三倍返しで返そう。それに地獄も悪くないと思えてきたよ。

「まあでも仕方ないしね。それじゃまた。元気でね」

沈黙。

出入口で改札をしている灰色に近づき、他の行列を作っている骸骨を押しつけて優先券を出そうとした所で、背後から宇楠ちゃんの叫び声が聞こえた。

「死桜院老！ 老さんもお元気で！ またいつか会いましょう！」

僕の券をとろうとした灰色が突然の言葉に固まった。

やれやれ……わかってないね、これじゃまるで青春漫画じゃん。

少年漫画の第一話目みたいじゃん。こういうの僕の性にあわないん

だけどなあ。

そして、僕の名を聞いて行列をつくっていた骸骨達があつという間に隊列を見出し、僕の側から一目散に逃げていった。

あーあ。ついてないのかついてるのか。とりあえず列がなくなつたからついてるのかな？

脇目も触れない清々しいまでの逃げ足。まるで街中で熊にでも会つたかのような反応だ。

何もしないのに……って思いが反面、まあ名を聞いただけで逃げられるつてもまあ無理もない話って言えば無理もない話なのも分かる。その程度に死桜院の名は有名なのだ。

普通の善良な市民のみなさんへの浸透率はイマイチな反面、善良でない市民のみなさんへの浸透率は極めて高い。そしてここ、地獄なんだよね。なんか宇楠ちゃんは冥獄とか言つてたけど、素人からしたらそんなのどっちでもいいし。

「死者が逃げたぞ！ 捕まえる！」

「くっ、一人たりとも逃がすな！」

周りの見張りをしていた灰色と、列の整理をしていた灰色があつという間に散開した骸骨たちを追つてもそもそと走っていく。灰色脱げばいいと思うんだけどそれじゃダメなわけ？ そんなんじゃ走れないでしょ。別に本人達が納得してるからいいけどさ。

なんか皆急に忙しそうになってるけど、僕にはどうしようもない名だけが暴走している所があるからなあ死桜院。名前だけ聞いても物騒じゃん？ 兄妹半分くらい物騒だけど、もう半分はそこそこ大人しいのにね。

宇楠ちゃんも突然の死者たちの暴走に啞然とした様子だった。表情はわからないけど、おろおろしてるからなんとなくわかるんだ。仕方ないから、唯一残っていた目の前の灰色に券を差し出して急かした。

僕に出来る事ないからねえ。さっさと審判なりなんなりしてもらおう。

こついつ時に職員の実度が知れると思う。

「ん……ああ、よし、優先券だな。お前は返霊も済んでるみたいだから、案内に従って審判課まで行ってくれ」

「案内って何なの？」

「矢印の張り紙がしてあるからその通りに行けば分かる。後はあちらの職員に聞けばうまくやってくれるから」

なんか俗物的だな。

分厚い封筒を渡され、何か釈然としないものを感じる。これってあれ？

中身を見てみたら、果たして幾種類ものよくわからない書類が入っていた。氏名とか住所とか書く欄あるし……しかも受取印押す場所まで……死んだら書類書いてもってって判子もらわないといけないの？

僕は神様とか信じてないから別にいいけど、敬遠な信者がこの事知ったら暴動が起きるんじゃないかなあ。

もうちょつとファンタジックにいこうよ。

まあ十億人も死者が出たらそりゃファンタジックになんてやっ
られないんだろうけど……

内部も、まあ通路が何やら頑丈そうな金属で出来ている事を除い
たら前世の構造と変りない。

矢印書いた紙もセロハンテープで止められているし、通路の途中
に自動販売機があったりする。冥獄の美味しい水とか鬼茶とか売っ
てる。コーヒーと清涼飲料とかは売ってない。なんかしょぼいね。
ちよつと興味があったからお金がないか、ポケットを探ってみたけ
どさつき全部返しちゃったから宇楠ちゃんの身分証明書らしきカ
ードしかなかった。

……あ、財布から抜き取って返すの忘れてたなあ。後で返そうと
思ってたんだけど、ごたごたしてたから。まあ気付かなかった宇楠
ちゃんが悪いんだよね。きつと。

職員証明書と書いてあるカードは、全く知らない僕の目から見
てもそれなりに重要そうだ。顔写真つきだし、職員番号とか生年月日
とか個人情報列挙されてる。電話番号と住所まで書いてあるよ。
うわ、宇楠ちゃん159歳とか。地球に行けば確実にギネスに乗る
ね。信じてもらえないだろうけど。

おまけに、カードは何やら最新式らしく、自動販売機のセンサー
に当てたら水が買えた。クレジットカード……ってわけでもないだ
ろうけど、無用心だなあ。こんなカードなくすなんて。黒い線と挿
し込む矢印があるのを見ると多分カードキーとかにもなってるよね。
便利すぎるのも考えものだ。とりあえず後で会ったら返そう。覚え
てたらだけど。

先に入った骸骨たちとは順路が違うのか、通路はすいていた。人

っ子ひとり出会わない。幅が広いから灰色や骸骨がいても余裕があるけど、ちよつと閑散としすぎな気がする。多分骸骨も返霊なるものをやって人の形を取り戻してから審判課へ行くんだらうけど、返霊って時間が掛かることなのかもしれないね。

美味しくもまずくもない水を飲みながら案内に従って歩く事十分、ようやく目的地が見えた。

『第三審判課』と古臭い看板プレートが付けられた扉。

多分ここでいいんだらう。

ためらいなくドアノブをひねる。ノックが先だったかなあと思ってたのは、既に扉を開けた後だった。

扉の中はなんとツ！なんて振る事もなく、中も普通の事務室だった。郵便局とか銀行に入ったみたいな感じ。職員が五人居たけど、皆忙しそうで扉を開けた僕に一回目を向けたけどすぐに自分の仕事にもどっていった。

なんか地獄って気がしないんだけど……中の人は灰色じゃないし、これもしかして逃げようと思ったたらすぐに逃げられるんじゃない？
一番近くのデスクで作業している人に声をかけてみる。

「あの……」

「何か御用でしょうか？」

「入り口で審判課に行けって言われたんだけど」

「ああ……優先券の方ですね。少々お待ち下さい」

そつけない対応だけどさすがに嫌な顔はされないか。渡した封筒から手早く書類を出し、丸を付けた。

んー……なんか本当にここが地獄なのかちよつと地震がなくなっ

てきた。あまりにも人間的だし。

「丸を付けた所をご記入の上、お持ちください」

「んー……これって皆やってるの？」

「え？ はい。死者の方には書いていただいております」

さっきの整理券見ると最低でも10億はいるはずなだけどなあ。皆これやってるのが。資源の無駄だよ資源の無駄。どっから紙代出てるんだ。死者なんて金にならないのに……。

疑問に思いながらもボールペンを動かす。えっと……名前住所年齢生年月日没年に死因……前科なんてのもあるぞ。保証人って何の保証人なの？ とりあえず埋められる所だけ埋める。家族の欄は書ききれなかった。兄妹だけで10人いるからね。特技なんて何に必要なのか訳の分からない欄もあったからとりあえず人助けと書いておく。嘘じゃないよ？ なかなか成功しないけど。

五分くらいで埋められる所は全部埋め終わり、再度職員デスクの方へ行った。

「あの……住所って生前の住所を書けばいいんですか？」

「あ……いえ、現在冥界に住んでいる方のみその住所を書いていたければ……冥界に住所がない場合は空白で結構です」

「保証人は？」

「保証人も冥界に知り合いがいる方のみで。保証人がいる場合、罪状の判決が出た際、善行積立制度を利用する事ができます。これは

罰を受ける代わりに人を助ける事で罪を償う事が出来るという制度です。まあ冥界が初めての方は保証人が居られる方はまずいないので空白で構わないと思います」

職員さんの話を聞く限りでは、これから生前の罪過を裁かれてその償いをするみたいだ。やっぱりここは地獄だったんだ。まあ冥界とか言ってるけど似たようなものでしょ。何だか安心したよ。

しかし善行積立制度か……僕にぴったりじゃないかな？
生前はあまり人助けとか出来なかったけど、僕だって成長してるつもりだ。

問題は保証人になってくれる人なんていないことだけど……地獄に知り合いなんているわけないし……

……あ、いたじゃん。宇楠ちゃんがいるじゃん。宇楠ちゃんが。また借り作っちゃうけど、彼女なら許してくれるね、きっと。

うん、これも世のため人のためだ。罰を受けるのも全然構わないけど僕はどちらかという人助けしたいし。

「保証人は名前を書くだけでいいんですか？」

「名前と住所、年齢、生年月日、職場の名前、電話番号、そしてご本人が居られない場合は保証人の方の身分証明書を預かってくる必要があります」

偶然だけど全部何とかなりそうだ。身分証明書持ってるしね。それにしても、印鑑はいらなのか……さすがに印鑑を用意するのは簡単じゃないからね。事情を説明して電話して持ってきてもらえないし。

僕がポケットから出したカードを見て、職員さんは目を丸くして

いた。

第四話：世界はくるくる廻ってる

世界はくるくる廻っている。スムーズに、静かに、それでいて力強く。それは、星単体で完成しているのだ。

だから、僕という異物が入り込んだ瞬間そのバランスは一気に崩れてしまう。僕の存在自体は世界と比べて本当にちっぽけだけど、でも繊細なバランスで成り立っていた天秤が崩れるのに力はいらない。ただちよつとした切っ掛けがあればいい。

そんなわけで、生まれて以来僕は誰の役にも立っていなかった。歩いても座つても寝ていても、どんなにバランスをとろうとしても、僕の全ての行動は天秤のバランスを容易に乱し、そしてその崩れたバランスを直すために再び奔走する。それがまた新たな崩壊を招き悪循環。

僕は死桜院の中では頭脳も運動神経も他に追随を見せないほど劣ってたけど、といつても、他の連中が化物だったのだが、少なくとも存在だけは死桜院の中でも飛び切りに悪辣だったんだ。

だから、僕は小を切り捨て、大を取るのではなく大を打ち壊しその中から小を救い出す事にした。大きな被害と小さな奇跡。多くの人間に迷惑をかけてしまっけど、それで誰も救わないよりは救ったほうがいい。

だから、じつとしていてくれという父さんの意見も間違いだ。僕がじつとしていても結局世界は容易に傾く。

全ての書類を書き終えたあと、見せてくれた僕の書類。

調べれば意外にも簡単に分かるらしく、死因の欄に増えていたそ

の文字を見て、僕は久しぶりにそんな事を考えた。

『隕石との正面衝突による蒸発死』

なるほどね……そりゃ人数もいるわけだね。地球に飛来するほとんどの隕石は大気圏に入る直前に摩擦で燃え尽きると聞いたことがある。ということは、それなりの大きさの隕石が僕にぶつかったわけだ。そして僕は死んだ。痛みを感じるまもなく。それがラッキーなのかはわからないけど、少なくともかなりの人間を巻き込んだ事は間違いない。

特に、相応の大きさの隕石が落ちると、衝撃はもちろん舞い上がった塵が風で飛ばされ、数年数十年単位で太陽光を防ぐとか聞いたことがある。さすがに十億は死なないと思うけどねえ。日本の人間全員死んでも1・6億なわけだし……

この隕石が僕を目がけて落ちてきたとか、そんな証明は誰にも不可能だろうけど、しかし家族がいたら間違はなく僕が妙な事を考えたせいだと言うだろう。そして僕自身もそう思う。そういう引きは妙に強いんだ。大体、普通ならよくわからないけど人が蒸発するレベルの隕石が地球に接近してきたら事前に見つかるだろう。NASAとかどっかその辺がさ。

「……………」

「えっと……どうかいたしましたか？」

「……………いや、大丈夫。反省してただけなので」

とりあえず、過ぎてしまった事はしょうが無いよね。今後二度と隕石が落ちてこないかなーなんて思わないようにしよう。それでひとまず手打ち。いきなり固まった僕を心配するような眼で見ている職員さんの事を考えるのがまず先だ。

「気分が優れないようでしたらお薬でもお持ちいたしましょうか？ お客様は死者ですので、精魂薬さえ服用すれば気分がよくなるはずですが……」

「いや、大丈夫です」

地球よりサービスがいいんじゃないか？ これ。

まあ地上でいきなり薬持ってこられたらそれはそれで問題だろうけど……精魂薬？

「それでは、書類の方は以上で結構です。保証人の方の身分証明書の方をお返しします。無くさずに本人に直接届けるようにしてください」

「これから自分がどうなるのかいまいち分らないんだけど、僕にこれを直接返せる機会ってくるかな？」

「……友人の方に聞いてないんですか？」

「聞いてない。あの子おつちよこちよいな所あるから……」

一人で早とちりしたり正体ばらしちゃいけないのに正体ばらしたりね。傍目で見えていただけだがかなり危なっかしかったよ。あれはあれで優秀なんだろうけど……

まあ、いくら何でも僕が勝手に保証人に仕立て上げる事まで予測する事は出来ないだろうし、彼女がその件について触れなかったのも当然と言えば当然だけど。出来れば事前に電話とかで一回連絡取りたいなあ。お詫びもかねてさ。お礼ももつとちゃんと言いたいし……

「これから老さんには、審判を受けて頂きます。別室で大審判官の方一名が貴方と一対一で向かい合い、その前科を詳しく抽出します。老さんにも黙秘権はありますが、偽証は不可能だと思ってください。そして、そこで明らかになった罪科によって償い 受けなければならぬ責め苦とその時間が算出されるのですが、今回は保証人がいるので行わなければならぬ善行の量として算出されます。この際、もし希望があれば善行と責め苦で分割して支払う形式にするという方法もあります。また、残った罪科はいつでも支払い形式を変更する事が出来るので、もし希望がある場合はお近くの審判課の職員までお問い合わせ下さい」

なるほど……いつでも変更する事が出来るのか……。
しかし、善行よりも責め苦を選ぶ人っているのかな？ まあそういう人は保証人がいないんだろうけど……

「善行積立制度を選ばれた死者の方は、善行を行う事によりその罪科を減らす事ができます。利用されない方は、幽界庁がその監督責任者となり、責め苦を受けていない間は地下官房に軟禁される事になり、様々な制約が課されますが、善行積立を選ばれた方は基本的に地下官房には収容されません。保証人が監督責任者となるため、基本的に保証人の方に全てお任せする事になります。選挙や運転免許などの一部の資格取得には制約が付きますが、それ以外での制約はほぼありません。この辺りは、前科が決まり次第渡される冊子に

詳しく書かれているのでその辺りを参照下さい。また、わからない事がありましたら冊子の裏表紙に書いてある電話番号までお電話ください」

え？ ちょっと待った。

思考が一瞬停止しかける。

面倒くさくてちょっと聞き流しちゃったんだけど、よく考えてみるとその内容だと保証人の意味が地上とはかなり違うんじゃない……

全て保証人の方にお任せて……やる気ないにもほどがあるですよ。責任とかそういう問題じゃないよ。このままじゃ僕はどう考えても宇楠ちゃんのもの的な立場になってしまう。いくらなんでも長時間あつたばかりの子の厄介になるといふのは勘弁してほしい。

僕は、違ってほしいという祈りを込めて確認を取る。

「それって、保証人の方に衣食住も世話してもらつ必要があるってこと？」

「一概にはそうとは言えませんが、大体的場合そのようになるケースが多いですね」

「……補助金が出るとかないの？」

「一切補助金はできません。基本的に、この制度は保証人側の意向を組んだ内容となっており、死者の方の権利が制限されない代わりにその資金については保証人側が負担する事になっております」

さすがにまずいかな。僕にも一応良心というものがある。

返せる当てのない資金を赤の他人同然の人間にだして貰うのは完全にアウトだ。法律が許しても僕のポリシーが許さない。水一本分程度ならまだ良心も痛まないんだけどね。

こりゃ諦めたほうがいいかもなあ。んー……

受付の下に張られている飲酒運転防止のポスターを眺めながら悩む。車じゃなくて空飛ぶ絨毯だけどね。

「やっぱりそれって負担になるよね？」

「……殆どの場合大きな負担となります。善行を積む際、保証人がその側で監督しなければならぬという制約もありますので、仕事をなさっている方だとつらくなるようです。そのため、善行積立制度を利用する方はそれほどいません。保証人がまず見つからないようです」

「なるほど……でも身分証明書だけでいいんだよね？」

「身分証明書をまず悪人……失礼しました、前科持ちの死人に預ける勇気がある人は少ないでしょう。財布も兼ねていますから……」

「ごもつともな話だった。」

泥棒にキャッシュカードを預ける人なんて普通いない。僕はお金には頓着しない方だけど、僕でも預けない。この世界の保証人は、現実世界での借金の連帯保証人以上にリスクーだ。

職員さんは、もう質問はないと思ったのか、締めに入った。

んー……そうだね。あれにしよう。

「老さんは保証人の方に感謝した方がいいでしょう。そして、一刻も早く善行を積んで罪を償ってください。それが保証人になる方への最大の恩返しとなるでしょう」

「保証人って今から取り消せる？」

「え？」

今までほとんど表情を変えず話していた職員さんが、口を大きく開けたまま固まる。そんな驚いた顔されても……

よく考えてみたけど、やっぱりこの制度を利用するのはまずい。宇楠ちゃんに迷惑をかける。保証人の意味が僕の予想とは違った。これは僕のポリシーに反する行いだ。

そもそも、気絶してしまった所を助けてもらい、その上優先券までしてもらった宇楠ちゃんには大きな借りがある。

だからこそ、負担の大きい保証人になってもらうわけには行かない。話を聞く限りでは、この世界の保証人は罪人と一蓮托生だ。金銭面での負担の他、行動面に置いても重要な部分で監督して、すぐ側で見えてもらわなければならないなんて、迷惑にも程がある。重すぎる。背負ってもらうには重すぎる。まして、許可があるならともかく今回は全くの勝手だからねえ。

僕は寄生虫になるつもりはないよ？

寄生虫になるくらいなら善行よりも責め苦を選んだ方がまだマシだ。それが、宇楠ちゃんへの善行になると考えればいい。もともと

痛みにはけっこう強い方なんだよ、僕。

「……取り消しは可能ですが、善行積立制度は利用できなくなりませんがよろしいですか？」

「構わないよ。知らなかった……こんなに負担が重いなんてね。これはない」

「……珍しい方ですね。許可を貰って身分証まで託されるほど信頼されているのに取り消すなんて……この職について初めて見ましたよ、そんな馬鹿」

目尻に皺を寄せ、難しい顔で呟く職員さん。その目は、今まさに書いたばかりの書類、保証人の部分に投げかけられている。

わかってないねえ。

「許可をもらってるとかは関係ないよ。僕は彼女に十分お世話になったからね。それだけでもかなり恩を返すのが大変だっていうのに、これ以上借りをつくっちゃたまらないよ。そんな重い物僕には背負えない」

まあ前提として許可ももらってないんだけど……

「本当によろしいのですか？ 保証人の方も貴方を背負う覚悟は既に決めていると思うのですが」

「決意が鈍る前にやっちゃってよ」

「……わかりました」

書く時は時間がかかったけど、消す時はあっという間らしい。す
ぐに、保証人欄が？で上書きされた書類が返されてきた。

ちよつと減つて返つてきた書類をまとめて封筒に入れる。なんか
まだあまり動いてないのに妙に疲れたな。

さて……次は大審判官だっけ？

「では、書類を持って廊下を出てすぐ左の部屋に入室してください。
審判自体は数十分で終わると思います」

数十分ねえ。思ったよりも時間がかかるな。それだけ色々やるっ
てことなんだろうけど。

前科……あまり酷い事はやった覚えはないけど、気づいてないだ
けでかなりあるんだろうなあ。直接人殺した事はないけど、間接的
になら腐るほど死んでるんだろうし、そもそもこの隕石が僕が原因
だったらそれだけで相当な数の人を殺している事になる。気づかぬ
うちに。……あ、でも多分僕が死んだ後だから罪は掛からないかも
しれないね。どうやって測るのは知らないけど。

「ん……ありがとう。あ、悪いんだけどこれついでに返しといてくれ
る？ 僕もう宇楠ちゃんと会えないかもしれないし」

ふと大事なことを思い出し、ポケットから身分証明書を出してデ
スクに置いた。水代使っちゃったけどその分は許してくれるよね多
分。いつか利子付けて返そう……可能ならだけど。

「わかりました、届けておきます」

「ありがとう、感謝するよ」

これで思い残す事はないかな。後は前科がどうなっているのか確かめるだけだ。責め苦が怖いとか関係なくて、低かったらいいんだけどねえ。僕がそれほど地球で迷惑かけてなかったって事になるし。そんな事考えながらふと前を向くと、もう役目を終えたはずの職員さんと目があつた。なんか言いたそうな顔だ。

「まだ何かあつた？」

「いえ……本当に後悔しないのかな……と」

「もしかしたら罪を償っている間に何回も後悔はするかもしれないね。でも後悔してもいいんだ。百回後悔したって彼女に迷惑は掛からないからね。もう身分証もないし、芽は摘んだ。僕は業火の中で魂が焦がれるくらい後悔する事にするよ」

「……そこまでの覚悟があるならもう何もいませんが。老さん面白いですね。どうしてここに来たのかわからない。見る限り、老さんは気味が悪いほど善人に見えます」

いきなり饒舌になつたな。書類申請の受理という責務が終わつたからかな？ 地上では業務時間が終わるまでが業務なんだけど……

僕は今更、職員さんの顔を見た。胸につけられているネームプレートにはアリシー・ウォークスと書かれている。外人さんかな？ 日本語違和感ないし冥界にそういう区分があるのかは知らないけど……綺麗なブロンドの髪と碧眼を見るからには地上で行つたら西洋系の人種だね。

「それを今から確かめに行くんだよ。まあ自発的に悪事を働いた覚

えはないけど、そういうの自分ではわからないものだろうしね」

「そうですね……確かにそうかもしれないですね。まあそれでも凶悪犯には見えませんが……」

「そりゃありがたいね。プロの目から見てそう見えるなら本当にそうかもしれないし」

ちよつと元気が出た。

しかし、アリシーちゃんはまだ何か言う事があるらしく、ちよいちよいとこちらを手招きした。

なんだろう、と近づくと、きよるきよる辺りを見回し、誰も見ていない事を確認した後声を潜めて話を続ける。

「実はここだけの話、今冥界の死者の量は飽和しています。つい先日、地表に隕石が衝突して大量の死者が出たらしく、団体さんが送られてきて、責め苦の施設も全施設十年先まで予約がいっぱいで、死人の方々は官房に寿司詰め状態っていうもつぱらの噂です。今老さん以外誰もここにいないでしょ？ 返霊の儀式の時点で止まっている死者の方が大量にいるんですよ。返霊は専門の技術者が数時間かけて行うものだし、その他の人員も全く人手が足りず、おまけに官房にもスペースがないらしいです。どうやらちよつと余裕が出るまで死者の方々は返霊の所で止めておくとか……」

何故かこつそりと面白い情報を教えてくれる職員さん。それって秘密じゃないの？

思い切り顔を近づけてくるので、なんか髪から甘い香水の匂いが薄く漂ってきてちよつと落ち着かない。

しかし、その話から考えると本当に僕がここまでこれたのはラッキーだったのだろう。あのまま行列に並んでたらここまで来るのに何年掛かっていたか……返霊の儀式まで終わらせてくれた宇楠ちゃんにはもう頭が上がらないね。次会ったら土下座するしかない。僕の鍛えた土下座スキルの見せどころが初めてくるか。

「なるほど……人手と場所不足か。なんか地上と変わらないね。もう第二地上とか名乗ればいいのに。で、何でそんな事を僕に？」

アリシーさんが、僕の問いににこりと笑う。花が開くような、とまではいかないけど可憐な笑みだ。何か企んでいるかのように口元がひくひくしている事を除けばだけど。

「退屈だった時に面白い物を見せてくれたからです。老さん、賭けをしませんか？」

「賭け？」

何を言ってるんだこの職員さんは。仕事中に賭けをする人なんて見たことないよ。

大体僕は……

「でも僕何も賭ける物持ってないんだけど？」

「賭け、というか提案ですね。老さん」

そして、アリシーさんは、指を一本ピンと立ててはっきりと言った。

「私は貴方は善人だと思う。だから、もし罪科がCクラス以下なら私が老さんの保証人になってあげますよ」

第五話：何を言ってるんだ？

何を言ってるんだ？ 正気か？

僕は、まじまじと目の前の職員さんを見つめた。

おでこに手を当ててみる。冷たい。そういえば人間じゃなかった。体温も人とは違うのかももしれない……って

じゃなくて

「何言ってるのかわからないんだけど」

「もし老さんの罪過がCランク以下だったら保証人になってあげると言っただけです」

それは分かる。Cランクとかよくわからないがとりあえずそれは置いて、さっきの流れぶった切ってない？ この職員。なにそれ地獄の職員はそんなサービスまでやってるの？

大体自分で負担大きいと言っただじゃん。わけわからない。考え方が違うのかな？

「えっと……何で？」

「理由なんてありません。強いて言えば面白いから、と言いますか」

「いや、つまらないと思うけどね」

てか、わかってないなあ。

僕は宇楠ちゃんに大きな負担をかけたくないんじゃないかと、他の誰にも大きな負担を掛けたくないんだ。人に負わせる重さじゃない。家族なら……まだわかるけどね。

赤の他人だよ赤の他人。もしかしたら道歩いていてすれ違っても気づかないかもしれないような……そんな関係だ。最低でも僕に大きな借りを作ってからきてほしいね

「大体僕はあまり人に迷惑を掛けたくないんだよ。もうかけちゃったものはしょうが無いけど」

「大丈夫です」

アリシーちゃんは僕が暗に断ると言ってるのを読まずに言う。地獄の人はお人好しが多いのかな。

さつきから地獄のイメージが崩れすぎだ。責め苦を負わせるための施設が十年待ちとか。何処に行っても罪人は迷惑かけるもんだねまったく。

「何が大丈夫なのさ？」

「内勤は今凄い暇なんですよ。何しろ客がストップしてるから」

なるほど……アリシーちゃんを見ると、確かに暇なんだろうね。でも、辺りを見渡してみると、皆けっこう動いてる。やってるところが何なのか分からないけど、傍目に見たら忙しいようにも見える。各デスクには静かに音を立てて動くラップトップ型のコンピューターと書類が乗ってるし、それぞれの職員さんも手を動かしている。少なくとも今暇に見えるのは目の前の女の子だけだ。

「あれはポーズです。公務員ですから、何も仕事がなくても働かなくちゃならないから……」

いいのか……それでいいのか！

どこの世界でもそういうのは同じなのか……
てか公務員なんだね。こんな若いのに……ああ、見た目通りの年
齢じゃなかったんだっけ？

「で、何が大丈夫なのさ？」

「いつでも有給が取れます。実際一年有給取った人もいるくらいで、
しかも有給の桁が違った！！

一年有給って……

生活の Spanien が違うんだろっねえ。何日有給もらえるんだろっ。

「一年って……一年も休んだら仕事忘れるんじゃない？」

「忘れたら忘れたでマニュアルを読んで思い出せばいいだけの事
です」

やっぱり忘れる事あるんだ……

しかし寿命が人間より遙かに長いのに文化形態が人間と同じって
一体どうなってるんだ

さっきから僕の頭の中はこんがらがってる。

アリシーちゃんは、身を乗り出さんばかりの態度で自分を押し売
るし、押し売りといっても、この場合僕は得をするんだろっけどな
んだか面白くない。いらない、と答えても頷かない以上アリシーち
ゃんにも相応のメリットがあるはずなんだけど、僕にはさっぱり思
いつかなかった。補助金はないって言ったし……恋愛感情なんて
のはいらないし……ないよね？

と思った瞬間には口に出ていた。この癖治らないかな……

「アリシーちゃん、まさか……惚れた？」

「……はっ」

鼻で笑われた。

淡い幻想は瞬く間に現実に吹き飛ばされた、どんな楽道家でもはつきりそうと分かる仕草だった。見事すぎて思わず拍手しそうになっちゃったよ。

まあどうでもいいけどねー僕は一目ぼれは信じない主義だ。もし一目惚れされても断じて信じないし、一目惚れしても僕はそれを自分に許すことはできない。

アリシーちゃんは、十秒ほどゴミでも見るかのような眼でこちらを見た後、大きくため息をついて言った。

「断じて勘違いしないでほしいですね老さん。私が、死者の貴方に惚れる？ ない、ないですよ天が落ちて来るくらいありえない。まあ勘違いさせてしまったようならすみません、謝ります。私が直接的にはつきりと言わなかったのが悪かったみたいですね」

「全くだね。僕もはつきりと言わなかったのが悪かったのかもしれないけど、僕はさっきから断るって言ってるんだよ」

「まあ落ち着いて、話だけでも聞いてください。この話は老さんにとっても悪いものではないはずですよ」

食い下がないなあ。

話を聞くだけなら別に各かじゃないけど……老さん”も”って事は、彼女自身にもそれなりにメリツトのある話なんだろう。

僕はただ裏のない好意があまり好きじゃない。高潔だろうけど好きじゃない。

裏のない好意なんて滅多にないもんだ。僕がやった事のように。

そしてまた、数少ない裏のない好意は得てしてうまくいかないものなのである…僕がやった事のように。

「実は老さん…私も以前からそろそろ有給とろうかなーと考えてたんですよ。仕事ないし」

「いやいや、あるでしょ。いくら死人がストップしてるからって…
…実際僕来たんだし」

「審判課は15番目まであるんですよ？ 数少ない優先券で返霊飛び越えてきた死人が何人いるっていうんですか。はつきり言って、今老さんがここに来たのは奇跡に近いですよ？ 実際今日まで三ヶ月ほど誰もきてなかったわけですから」

15番目まで…人員削減しようよ。死者が開放されたら凄く忙しいくなるんだろうけど…ね。

他の課の手伝いをやらせるあるんじゃないの？ 上は何してるのさ。こんな暇そうな職員さんがいるってのに。

「そこで常々有給を取ろうと思っていたんですが、そこで一つ問題が…何だかわかりますか？」

「んー…わかんないよ」

分かるわけがない。

仕事がなく有給を一年もとれる部署で存在する問題？

まさか保証人にならないと有給取れないなんて法はあるわけがないし、むしろ三ヶ月も客がこないのに今まで残ってたこと自体がびっくりだ。外勤の宇楠ちゃんはあるな灰色着て頑張ってるってのに、見習いなよ。

アリシーちゃんは考えている僕に向かって、きれいなビー玉見たいな青い瞳を輝かせ、口の両端を微かに持ち上げた。まるで笑いでもこらえているかのようだ。

「それは……暇です！」

「へ？ ……暇？」

「はい。暇です！」

いや、そんな自信満々に言われても意味が分からない。暇なのは見てればわかるけどね。

「いえいえ、そうじゃないんです。私実は有給をとってもやることになかったんですよ」

アリシーちゃんは一緒に遊ぶ友人もいないかわいそうな子らしかった。

「いやいやいやいや、そうじゃないですよ！ 私にだって友達くらいいます！ そうじゃなくて、一年もの間やることがないって事ですよ！」

ああ……なるほどね。やっと得心がいった。

裏のない好意のように見えたそれは予想した以上にくだらない源があつたらしい。

分からないからの沈黙ではなく、あまりの事に声も出ない。

信じられない……この子、僕という負担を暇つぶしに使うつもりだったのか。

「そりゃ、私だって女の子ですからショッピングしたり映画観に行ったりやりたい事はありますよ？ でも、そんなの一年も続けられるわけがないでしょ？ いくらなんでも飽きます。退屈は吸血鬼をも殺すってよく言うでしょ？」

よく言わない。聞いたことない。

「それに、映画やショッピングは有給を使わなくても十分行けます。それで、もつと何か有意義な事はないかなーと考えていた所で老さんが来たわけです。どうですか？ 悪い話じゃないでしょ？」

「へー」

やる気のない返事を返す。

そもそもそんなことやるくらいなら有給取らなきゃいいんじゃないの？

とか言っても、納得してくれないんだろうね。

「そりゃ、毎日とは行きませんが、出来るだけ協力しますよ。どうせ暇なんです。老さんに付き合ってたほうがよほど楽しいはず……老さんも善行を円滑に積み立てることができてハッピー、C以下なら一年も頑張れば罪過がなくなるはずです」

「なるほどね……」

なるほど……その理由はどうかとは思いますが少なくとも論理的ではある。確かにそれなら双方ともメリットがあるようにも見える。正直僕だけにメリットがあるような気もするが、相手がそれを楽しめるんだつたらそれはそれでウィンウィンの関係なのかもしれない。

「でもさ、僕を養わなきゃいけないってことでしょ？ 食べ物や着るものはどうなのかはよく知らないけど、住むところは必要でしょ？ 僕お金ないけど、アリシーちゃん本当にそれでいいの？」

「大丈夫です。私もそれなりに稼いでますし、貯金もありますから」

にこここ笑ってる様子は唯の十代半ばの女の子にしか見えないのに、考えてる事ややってる事は随分ぶっ飛んでるね。

他の職員さん達も、アリシーちゃんの熱弁が聞こえたのかちらちらこちらを見ているのに、アリシーちゃんは気にする様子がない。

僕が気になるんだけどなあ。

まあ、でもともかくそんな事情があるならお世話になるのも悪くないかもしれないね。あまり他人に負担を掛けたくないのは事実だけど、それでも相手がそれを負担と考えないというのなら考えてみるのも悪くない。僕は善人であるとは思うけど、決して一人で何もかも出来ると思うほど傲慢ではないつもりだ。手助けしてくれるというのなら手助けしてもらおうのも、この場合ちょっと癪だけど間違いない。

お金も返す方法を見つけて何とか返却すればいいし、その有給の一年を超えてもまだ罪が残っていたら今度こそ残りを責め苦で払えばいい。

「まあそれなら……その時は是非お願いしようかな」

「はい！ お願いされました」

明るい返事。アリシーちゃんは、笑顔で右腕をさし出してきた。出された右腕を取り、僕とアリシーちゃんはしっかりと強く握手を交わした。

そつえばCクラスの罪過ってどの程度なんだろつ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5609q/>

冥獄の国

2011年2月16日14時10分発行